

2013年に入って国内では4件の風車落下事故が発生した。うち3件は設置から10年以上が経過した風車だ。部品の金属疲労や加工不良といった個別の事情

サイテライト

はあるにせよ、設置を決めた当時の風況調査が未熟だった点も無視できない。業界関係者によると、地表からの高さ、風向きによって発生する乱流の解析などシミュレーション技術が

相次ぐ風車落下事故 風況調査の未熟さ否めず

進歩した現在とは異なり、風の強さを示したメッシュ図に基づいて「この辺りにこの程度の風車を建てればよい」という程度が当時の認識だったという。

事故の要因の1つには、設置場所の風を調べ、合った風車を建てるといふ「当然のことがなされていない実態があった」（同）。

風況シミュレーションを研究している九州大学応用力学研究所の内田孝紀准教授は「シミュレーションに基づいて立地や風車の大きさを決めれば、故障しにく

く、高い設備利用率が見込める」と話す。

経済産業省は「今後事故が発生する場合は国がさらに一歩踏み込んで対応する」との考えを示しており、日本風力発電協会（東京・港）は業界を挙げて地点調査に基づいて風車を選ぶなどの対策に乗り出す方針だ。全量買い取り制度という追い風を受けて、風力発電が勢いよく回り続けるためには、当たり前の能力を發揮させるための組織や技術面での成長が不可欠と言えそうだ。（菊池貴之）